工場の正社員先輩と猿のようにベランダでエッチ。彼氏彼女いない歴がかなり長い二人。募り募った溢れる性欲を夜明けまでの長時間セックスで全て解消

子供の頃より抱いていた役者の夢を追い学校へ通いながらパートで工場勤務のツヨシ。力仕事が大半を占め大変ではあるが、面白さ、やりがいも感じていた。

自動車の部品の製造で、大会社の一部署であるため、小さな労働力の一部という主観が強い。

働き始めて１年が経過し、仕事もいい感じに覚えてきたある日、本社から社員１人の女性が手伝いに工場へやってきた。

「連休に向けての大量受注で忙しい今日、臨時で本部の方から手伝いに来てくれた佐竹さんだ」

正社員の上司から頼まれ、この工場で１０年以上になる先輩のパート社員の西田に丁寧に紹介してもらったツヨシ。

佐竹ミユキという。

ミユキは、ツヨシに向けて穏やかな笑みを見せながらゆっくりと丁寧におじぎをした。

西田によると、ミユキはまだ入社２年目とのことだが、清楚で高潔というか、妙に落ち着いていてキャリアも思わせる雰囲気を漂わせている。

忙しい一日が過ぎ、仕事終わりにツヨシに話しかけるミユキ。

「パート社員さんから聞きました。役者しているらしいですね。素敵ですっ！！」

ツヨシは少し恥ずかしくなり、汗をかいて肌にへばりついたＴシャツを少し掴む。

工場を出ると、ミユキはツヨシに言った。

「家、歩いてじゃちょっと遠いって言ってたよね。私車だから送っていこうか？」

タイムカードを押すまでの時間の会話で、ツヨシの方がミユキより１歳年下だということが判明していた。

「いいんですか？じゃ、じゃあお言葉に甘えて・・・」

車の道中、これまでの経歴などを互いに話し合った。

「へぇそうなの・・・・夢を追うのも大変なのね。私なんてキャリアウーマンまっしぐらだから・・・」

ツヨシは女性に興味津々だった。特段、目の前でハンドルを握るミユキに限ったことではない。女性全般にだ。

高校を卒業し、少し職を転々としたあと、役者を目指し都心へ出る。

しかし心の中は常に燃えているのだった。

女性を愛したい。

ツヨシはミユキに返す。

「キャリアウーマンですか・・・なんかそれも大変そうですね」

歩む道が違う自分たち。

しかし立場は違えど男女同士。

ツヨシはマンションの玄関まで見送ってくれたミユキの手を引いた。

咄嗟の出来事。だけど自分の本心だった。後先も考えず・・・。

ソファの上。

気がつけばツヨシはミユキと裸で無心状態に陥っていた。

無心、つまりは何も考えず本能に身をゆだねる状態。夢中。夢の中。誰もがこうしたい、と本心で直感的に思う、その状態が現実に起きている状況。つまりは夢の中、夢中。

ミユキの穴に自分のペニスが挿入されている。

―――――― 体験版はここまでです。 ――――――――――――――――――――――――